View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Gunma University Academic Information Repository

群馬大学教育実践研究　第35号　91～101頁　2018

子どもの生活をより豊かにするアート活動の考察
― 地域に向けたBFAプロジェクトはいかに始まったか ―

郡　司　明　子[1)]・宮　川　紗　織[1)]・上　原　康　央[2)]・福　島　　直[3)]・
石　原　加奈子[3)]・毛　塚　鮎　美[4)]・岡　本　麻　衣[5)]

1）群馬大学教育学部美術教育講座
2）大森こども園
3）ARIGATO COMPANY
4）群馬大学大学院
5）群馬大学４年

Consideration of the Art Activity to do Life of Chiidren more wealthily
—How did BFA project for the area Begin—

Akiko GUNJI [1)], Saori MIYAKAWA [1)], Yasuhisa UEHARA [2)], Nao FUKUSHIMA [3)],
Kanako ISHIHARA [3)], Ayumi KEDUKA [4)], Mai OKAMOTO [5)]

1）Department of Art, Faculty of Education, Gunma University
2）Omori infant school
3）ARIGATO COMPANY
4）Graduate School of Education Gunma University
5）Faculty of Education, Gunma University

（2017年８月31日受理）

１．はじめに

本稿は、“BFAプロジェクト”と名付けた幼児のアート活動における準備過程と企画コンセプトに加え２回の実践について分析し報告することを目的とする。

本プロジェクト立ち上げの契機は、園舎の建築や内装などを手がけるARIGATO COMPANY株式会社代表取締役である福島から郡司にアートワークショップの依頼があったことに始まる。その際、両者の人材育成に関する考えや教育観等を語り合う中で、社会的な問題解決や創造的な未来を思い描くにあたり、幼児期の生活や遊びを支える環境が重要であるとの考えが一致した。子どもを取り巻く環境において、ハード面としての物理的な空間のみならず、子どもたちの生活や遊びといった活動の中身＝ソフト面からも充実した方向性を探り、広く社会に提案していくことを共通の目的として本プロジェクトを立ち上げた。

プロジェクト名である“BFA”とは、実践のフィールドとなる大森こども園にちなみ“Big Forest of Arts”の頭文字を取った略称である。この名称には創造的な活動や体験が積み重なり、地域や社会を包括するアートの大きな森になる、という意味を込めた。まずは、子どもたちが実感として生活世界に出会い、交わり、学ぶ過程の基盤に「感じて、考えて、行動する」アートの活動を位置づけたい。そして、子どもたち一人ひとりの柔らかな芽が、いずれ個性ある大木へと成長し、大きな森＝コミュニティの形成につながることを願う。具体的には、このプロジェクト自体を大森こども

園から高崎市における保育の現場に広げていきたいと考えている。そのため、本プロジェクトは長期的な取り組みを想定している。子どもの生活をより豊かにする上では、外部の者が実践をする非日常のアート活動から、園での生活において保育者が日常的にアートの活動を展開していくことが理想である。そのための方法等も検討していきたい。

なお、本稿は連携プロジェクトの発案から準備、初期の実践を中心に取り扱い、以降の実践や展開については続編として稿を改める予定である。また、本論文は各項目を末尾に記名の執筆者が執筆し、全体を宮川がまとめた。（宮川紗織）

２．BFAプロジェクトの企画コンセプト

２－１．アートプログラムに期待すること

「子どもにより良い環境を創造する」これが私たちの事業を通し行っていることである。私たちは、建築や家具などのデザイン、制作をしているが、今回はアートという角度から子どもたちの環境というものを考える機会を得た。

国立の群馬大学と、地方の一社会福祉法人である大森こども園が、互いに手を取り合い、子どもたちにアートの環境を提供していくと聞いただけで、とてもワクワクするところがあった。大学という場での幼児・児童の研究の成果が、実際に現場で試されることは少なく、また逆に、こども園や保育園、幼稚園など、実際の子どもの環境下においても、子どもたちにアートに触れさせることはほとんどないということを知り、私が両者の仲介役となり、プログラムの手助けをしたいと申し出た。私たち大人は子どもたちに対しどうしても、指示と命令が多くなってしまう。このアートプログラムで、私は、子どもたちから指示と禁止の日常を解放し、気のおもむくまま、文字通り自由に活動してもらうことを一番の望みとした。

私たち大人からは物珍しくないようなものも、子どもたちにとっては発見と出会いであり、新たなものを見る子どもたちの目は好奇心に満たされ、その喜びと驚きを体全体で表現する。その目は、手元だけにとどまらず、まだ見ぬ先の活動にまで向けられているようだった。その好奇心こそが、学びという中では最も重要なことであり、子どもたちは与えられたものに満足するのではなく、まだ見ぬ先へ好奇心を持ち自らが進んでいくことを体験するのではないか。しかし、子どもたちは大人からの指示と命令に慣れ、むしろそちらの方が安心するのか、自由にやるということに戸惑いがあるようにも感じた。

このアートプログラムを通じ、子どもたちに自由な表現と、好奇心というものがさらに育まれていくことを真に期待している。大人、子ども双方が主従の関係なく、私たち大人が、子どもたちから、生きる上で大切なものは何かを感じ取れるような、まさに好奇心と自由に満たされた場をつくりあげ、大学や園にとって互いが追求できる可能性というものを、さらに広げていくきっかけになることを望む。その結果として、子どもにとってのより素晴らしい環境が実現されていくことが、私たちがこのプログラムに関わる役割だと考えている。（福島直）

２－２．子どもの生活とアート活動の親和性

幼児期の子どもの生活は、探索活動に満ちている。植え込みにダンゴ虫を見つけては、手に取り、くまなく観察する。草花から色水をつくり、光に透かして見る。大小の箱をつなげてロボットをつくり、日々改良を加えていく。これらは、大人によって「やらされる」のではなく、子ども自ら主体的に外界に働きかけ、対象と対話（やりとり）しながら自身で納得のいくまで続ける遊び＝学びの姿である。元来、子どもは知りたい、わかりたい、できるようになりたい、そのために行動したい！という思いの塊のような存在である。特に幼児期はその思いをからだ全体で発信している。そのような子どものありようとアート活動は実に親和性が高い。

アートの活動とは、身体性（気づき－感じて－動く）に基づく他者（もの、こと、人、場所）とのコミュニケーション（対話）であると同時に、その過程を可視化する創造的な行為や表現であると筆者は捉えている。[2)] 予め決まったゴールや答えに行きつくための道程ではなく、不確実性や未知性に向かってひらかれた道なき地図を行く探索行為でもある。つまり、対象との対話に基づき、正解よりも自他の納得解に辿り着くことを目的とした活動といえよう。そのこと（過程）自体が創造的な行為であり、結果として豊かな表現を創出させていく。今なお学校教育は、いかに「教えて」「答えさせる」か、「できるようにさせる」か、という

ことに躍起になっているが、かたや現実社会に目を向ければ、決められた答えに行き着くよりも、右往左往し、失敗を繰り返しては試行錯誤しながら他者と折り合いをつけ、自分なりに解を探していくことの方がはるかに多い。「指導する」ことの重要性も然りだが、学び手自らが欲して主体的に行動することほど尊いものはない。子どもの遊びもアートの活動も「そのこと自体が楽しい」という生きる喜びを醸成する。そして、「そうせずにはいられない」という切実感に支えられながら、根源的能動的な意欲を育み、真に生きて働く探究心や自尊心（＝生の技法）が養われるものなのである。すべての人の「生」において遊び＝アートは不可欠であろう。

アート活動の展開においては、様々な表現媒体の有効性が考えられるが、筆者の専門（美術教育）からは身体性を喚起したり、コミュニケーションを誘発したりする上で、あらためて造形性（形・色・質感）は多大な可能性にあふれ、活動（学び）を支える教材として実に優れていることを強調したい。造形活動は他者への呼びかけ－応答（コミュニケーション）において、手応えを実感しながら展開していく特性がある。したがって、デジタルな環境のもと、子どもの擬似体験が加速度的に広がる昨今において、造形的なアートの活動が「体感」という価値をともなって展開する重要性はさらに高まることだろう。

さて、このようなアート活動を子どもの日常において展開することによって、より豊かな園での生活経験につなぎたいと考え、BFAプロジェクトが立ち上がった。美術（アート）教育の立場からよりよき活動内容を、建築の立場からよりよき環境を、園からは総合的な子どもの育ちを、それぞれに専門性を活かしながら協同して共により豊かな子どもの生活を創造していくことが本プロジェクトのねらいである。教員養成大学の特性も踏まえ、今後教育現場に巣立っていく学生にとっても学び多きプロジェクトとして展開していきたい。（郡司明子）

３．実践に至るまでの準備プロセス／記録

・初打ち合わせ　H28/11/24

平成28年秋、福島から郡司に幼児へのアートの活動を実践していきたい旨、打診があった。これを受けてARIGATO COMPANYの福島、石原、群馬大学の郡司による初回打ち合わせを行った。ここで、互いの人材育成に関する考えや教育観、表現に関する価値観を共有し、プロジェクトを始動。その後、ARIGATO COMPANYと関わりの深い大森こども園をフィールドにしていく運びとなった。

・園での打ち合わせ　H28/12/21

大森こども園にて、上原園長と副園長、ARIGATO COMPANYの福島、石原、群馬大学から郡司、宮川、岡本の計７名の主要メンバーによる初顔合わせが行われた。ここでは主に活動の趣旨の確認と今後のスケジュールの話し合い、子どもたちの日常生活や行事に関すること、各クラスの子どもたちの人数などの情報を共有した。今後の予定を照らし合わせ、まずは２ヶ月に１回程度の実施が実現可能であると判断された。対象児クラスは４歳児（37人）と５歳児（30人）、活動時間は登園から昼食までの午前中それぞれ40分、50分程度で実践していくこととなった。本プロジェクトでは活動終了後も、子ども、保育士、保護者、園に関わる全ての人が実践内容を振り返り、共有することができるように実践の可視化（ドキュメンテーション）[1)]を試みることとなった。また、様々な素材に触れ、体験し、刺激を受ける中で子どもたちの生活がより豊かになるような内容や季節感を取り入れた内容を工夫していくことを課題とした。さらに、実践日には活動終了後そのまま昼食をとり、その日の感想を子どもたちから聞いたり、先生方とも振り返りの時間を設け、意見交換や造形活動の価値を共有したりすることで、次回の活動に活かしていくことにした。

・ネーミング会議　H29/4/11

郡司、宮川、岡本の３名でプロジェクト名について話し合った。多くの案が飛び交う中で、“Big Forest of Arts”という名称で決定した。Artではなく、Artsという表記にしたのは、子どもの日常生活から出発し教科のような枠組みや隔たりをなくして、造形･音楽･身体・言語など多様な表現が統合される活動にしたいという思いからである。（BFAに込めた願いについては１．はじめにで記述した通り）

・「色紙あそび」実践的検討会　H29/4/12

初回の実践に先立ち実践的な検討会を設けた。この日は、郡司、宮川、学生５名で行った。色紙と身体の触れ合いを十分に行った後、窓やプラスチックダン

ボールに色紙を貼る活動を行い、プラスチックダンボールをどのような形で設置するかなど検討していった。その結果、蛇腹折りで組み立て、下にも敷くという方法に決定した。こうすることで、対面及び周囲の動きや気配も柔らかく感じることが可能となり、お互いに刺激を受け、面白い表現が生まれた。また、強度面でも優れ、活動範囲も広く取れる方法となった。

・「あわぶくあそび」実践的検討会　H29/6/14

第２回目の実践に関する検討会を郡司、宮川、学生３名で行った。前半は主に活動の流れについて、後半は割れにくく発色が良いシャボン玉液の調合等に関する教材研究を行った。今回特に留意すべきことは、シャボン玉液の誤飲であったため、事前にストロー１本１本に２箇所の穴を開け、間違って息を吸ってしまっても口まで到達しないようにした。

実践前に学生を交えた検討の会を設けたことで、参加する学生と当日の活動の流れを確認するだけでなく、素材選びを始めとする十分な題材研究や環境の想定を行うことができた。私たち大学側も実践に向けた試行錯誤を通じて、新たな発見や気づきが生まれる学びの場となっている。　（宮川紗織）

４．実践の記録

４－１．色紙あそび

【ねらい】からだ全体で色紙と戯れる遊びを通して、色紙の動きや重なりの変化を楽しむ。

【実施の詳細（表１）】平成29年４月21日（金）４歳児（37人）の活動（９：40－10：20）、５歳児（30人）の活動（10：40－11：30）

【活動の概要】仲間と共にからだ全体でお花紙の触った感じや動きを楽しみ、色の重なりや対比の面白さを体験する。

【メインファシリテータ】郡司明子

【ファシリテータ補助】宮川紗織・石原加奈子

【記録】福島直・毛塚鮎美・岡本麻衣・和賀あずさ

表1　「色紙あそび」の実践（５歳児の活動）

主な活動	子どもの活動（行為・発話）	省　察
○初めのあいさつ、自己紹介 ○からだほぐし ・「右手と左足で握手できるかな？」 ・足首をぐるぐる回す ・足をパタパタ叩く ・左右を交換して繰り返す 	・話を聞く。 ・体育館全体に広がる 「できる！」「難しい！」 ・前の方の子どもたちはだんだんできるようになってくる。 ・足をパタパタして、笑いながら「いたい、いたい。」 ・自分の足をよく観察している子どももいる。（4歳児の活動ではあまり見られなかった子どもの姿。） ・一人だけストレッチに参加しない子ども。 ・不思議そうにファシリテータが持っている色紙を興味深く見ている。	・左右の区別はつかない様子。 ・手の指を足の指の間に挟むことが難しそう。おそらく、ファシリテータの様子がよく見えていない子どもが多いため。 ・左右反対にすると少し感覚が違うのか、なかなか参加できない子どももいた。
○素材との出会い ・好きな色紙を選ぶ 	「折り紙じゃない？」 「紙…？」「お花がみ…？」 ・色分けされた色紙を見ている。 「おれはこれ！」 ・ファシリテータの指示をよく聞いて行動している。	・周囲を見て落ち着いて自分が色紙を選ぶ順番を待っている。 ・手や頬で優しく触ったり、両手でたたいたりして触り心地を味わっている。

・「どんな音がしますか？」 ・「どんな触り心地がしますか？」 ・「どんなにおいがしますか？」	・色紙を床に重ねたり、ひらひらさせたりして遊ぶ様子。「シャカシャカする」 「（色が）一緒！」「ふわふわ。」「あったかい。」「オレンジの匂い。」「いちご」	・色から匂いや味を連想している様子。
・色紙をふわっと投げてキャッチ ・色紙を手に当てたまま歩く ・友達と色紙の交換 	「匂いしない。」 「おれやりたい！」 ・色紙に息を吹きかけて動きをつくっている様子。 ・ファシリテータの様子を観察しながら自分でも挑戦する。「できたできた！」 「先生、みてー！」 ・三人で動きながら色紙を交換する。	・とても嬉しそうに活動している。 ・手だけではなく、おなかに付けて走っている子ども、色紙を手にもって走っている子どもなど、各々が自由にからだを動かしている。
○色紙遊び ・窓際に集まる 	「なんで？」「くっついてるー」 ・窓についている色紙を不思議そうに触る。 「この紙（自分が持っている色紙）でもくっつく？」 ・窓やプラスチックダンボールに向かって走っていく。 「おれこっち！」	・思い思いに動き、躍動感があふれる空間になっている。 ・集中してファシリテータが窓に水を利用して色紙を貼り付ける様子を見ている。
・窓やプラスチック段ボールに色紙をつける 	・各々が自分の場所を決定していく。 「これかければいいんじゃないの？」 「こんな高いところにやっちゃっていいの？」 「○○君何やったのー？」 「丸めたりもできるよ。」 「見てー、すごい？」 ・ちょうちょうの形の色紙をつける。 「面白いからこれ見てて！」 ・色紙に水をつけ固めて塊をつくる。 ・足の裏についた色紙を確認する。	・プラスチックダンボールの透け感を楽しんでいる様子。 ・各々自分の表現に集中している様子。 ・友達の表現が自分の表現に繋がっていく様子。 ・色紙自体を水に溶いたり、壁面だけではなく床面にも色紙をつけて楽しんでいたりと、子どもたちが自分自身の表現を開拓していく。
○振り返り、作品鑑賞 ちょっと離れて見てみようか	「楽しかった」「まだやりたい」 ・色彩豊かな体育館内を見ながら帰る。 「なんかきれい！」 「あそこおれがやったよ」	・子どもひとりひとりの満足度が高く、まだ遊び足りない様子。 ・友達との対話を通して、鑑賞を楽しんでいる。

４－２．あわぶくあそび

【ねらい】からだ全体でシャボン玉の動きや色、泡独特の表現を味わう。

【活動の概要】からだ全体でシャボン玉と戯れ、動きや色を楽しみ、泡を用いて表現する。

【実施の詳細（表２）】平成29年６月23日（金）５歳児（30人）の活動（９：40－10：30）、４歳児（37人）の活動（10：40－11：20）

【メインファシリテータ】岡本麻衣

【ファシリテータ補助】郡司明子・石原加奈子・白石小百合・山本爽佳

【記録】福島直・宮川紗織・毛塚鮎美・和賀あずさ

表2 「あわぶくあそび」の実践（4歳児の活動）

主な活動	子どもの活動（行為・発話）	省　察
○初めのあいさつ、自己紹介 ・前回の活動を覚えているかな？ ○5歳児の活動でつくった作品を鑑賞 	・話を聞く。 ・「覚えてる！」「折り紙で」「ここに紙がいっぱいあったんだよ！」 ・「(5歳児の活動でつくった画仙紙の作品を指しながら）次は絵の具だよ！」 ・「わかんない」「絵の具！」「手がある」 ・「分かるよ！（用意してある道具を指して）そこにある！シャボン玉でしょ？」 ・「えー！！！」 ・「うん！！！」	・前回の活動（色紙遊び）を覚えている様子。 ・活動場所の様子から今日の活動内容を予想している。 ・もう少し近付いて見ると細かい部分まで確認することができ、より鑑賞が深まったかもしれない。 ・今日の活動に興味津々な様子。周りの環境をよく見ている。
・何で描いてあるかわかるかな？ ・みんなもやってみる？ ・シャボン玉をやったことがある人 ・シャボン玉をやったことがない人 ○注意事項の確認 ・ファシリテータが実践しながら、シャボン玉の液を飲んではいけないことを伝える 	・手を上げる(ほぼ全員)。 「おうちでやったことある！」 「おうちと外！」 ・手を上げる（1人)。 ・真剣に話を聞く。 ・ファシリテータがシャボン玉をつくる様子を見て、身を乗り出しながら「おー！」と声を上る。	・なぜ色が付くのかは分からない様子。 ・ファシリテータの言動にリアクションし、硬い表情が笑顔になり、ワクワクしている様子が窺える。 ・ファシリテータに自分の話を聞いてほしくて仕方ない様子。 ・シャボン玉が膨らむ様子を嬉しそうに見ている。活動への意欲が高まっている様子。
○シャボン玉と触れ合う活動 	・さくら組（その後すみれ組と交代）：シャボン玉をつくる ・「赤がいい！」「青！」 ・大きなシャボン玉をつくろうとする。 ・友達の画用紙に吹いてあげる。 ・すみれ組（その後さくら組と交代） ・色のついた液を眺める。 ・先生に見せに行く。 ・大きなシャボン玉をつくろうとする。 ・友達の画用紙に吹いてあげる。	・色を選べることが嬉しそう。 ・いつもと違うシャボン玉液に興味津々な様子。 ・大きさを確かめながらゆっくり膨らましている様子。 ・シャボン玉の数や大きさを楽しむことから、画用紙に色をつけることへ活動が変化した。 ・シャボン玉の不規則な動きと一度にたくさん発生するという特徴が、からだを動かす要因になっている。

    ○画用紙にシャボン玉や泡を使って描く ○振り返り、作品鑑賞 ・真っ白だった紙はどうなった？	・すみれ組（その後さくら組と交代） ：手／紙でキャッチ ・「きゃー！」と叫びながら、体を激しく動かしてシャボン玉と触れ合う。 ・足で踏む。 ・ジャンプする。 ・シャボン玉を潰さないようにそっと手に乗せようとする。 ・スタッフに画用紙を見せる。 ・友達のシャボン玉をもらいに行く。 ・画用紙に残ったシャボン玉を見て紙を逆さまにする。「すごい！」 ○新しい画用紙にシャボン玉を使って思い思いに描く。 ・ストローで描く。 ・ストローを細かく動かして泡立てる。 ・友達の液をもらう。 「黄色ちょうだい！」 ・友達の様子をジッと見て真似をする。 ・「オレンジって何色と何色混ぜればいいのかな？」 ・足を使って描く。 ・ブルーシートの上にシャボン玉を吹いてみる。 ○ぶくぶくとコップの中で泡立てて上から画用紙を被せる。 ・「できない。」 ・コップから溢れた泡を揺らしてみる。 ・ストローについた泡を吹く。 ・友達と泡の量を比べる。 ・自分の作品を見る。 「青だらけ！」 ・友達の作品を見る。 ・先生・スタッフに作品を見せる。 ・友達の紙と自分の紙を重ねてみる。	・シャボン玉の触れたら消えてしまう性質を理解した関わりをしている。 ・紙に色がついて嬉しそう。 ・友達と積極的にかかわりながら、いろんな色のシャボン玉を集めようとしている。 ・消えずに残ったシャボン玉に驚いた様子。逆さにしても落ちないことを確かめている。 ・スタンプをしたり、線を描いたりして工夫している。 ・色にこだわりをもって活動している様子。一人一色にしたことが子ども同士のかかわりを増やしている。 ・友達の活動から刺激を受けている様子。 ・色のつくりに興味をもっている。画用紙の上で起こる混色から刺激を受けたのかもしれない。 ・身の回りにあるものを使って自分なりの表現を楽しんでいる様子。 ・活動に熱中している様子が窺える。 ・液が少なくて泡立ちにくい子もいたようだった。コップを傾けて液にストローをつけるようにアドバイスをすると上手くできたため、嬉しそうだった。 ・自分の作品を見てもらえて嬉しそう。 ・いろんな色を比較して見る良いきっかけになったように思う。 ・最後まで飽きることなく熱中している姿が多く見られたため、今後も普段の遊びの中に取り入れていってほしい。

５．実践の振り返り

５－１－１ 大森こども園より「BFAプロジェクトに参加して」

本園ではアート活動に力を入れてきた訳ではないが、レッジョ・エミリアや他園の視察を通してその重要性を感じていた時、福島より本企画の提案があり参加するに至った。

日頃の本園の表現活動は主に絵画が中心である。園外保育や散歩での楽しかったことや家族の絵を描き、それに担任がコメントを記入して保育室に飾るものである。第一回目の色紙を使った活動でこれまでの取組とに大きな差を感じた。

先ず導入の違いである。初対面であることを考慮し、体操をすることにより子どもたちの緊張を解きほぐしリラックスさせ、信頼関係を築いた。次に活動の丁寧な説明やイメージ作りをして関心を高めさせた。これまでの活動では導入の時間が短く、どうしても注意事項が多くなりがちである。もう少しイメージを膨らませながら活動に入った方が楽しい活動になるのだろう。

又、発想でも大きな違いがあった。色紙を揺らしながら飛び跳ねたり、透かして見せたりという遊びを取り入れていることである。本園なら説明の後、いきなり子どもたちに好きな色紙を選ばせ、直ぐにガラスに貼ってしまうだろう。そして、この糊を使ってガラスに貼るというアイデア自体が先ず出てこない。描いた絵を飾るように、剥がれるまでデザインとして色紙を残しても問題は無いのだが、汚れることを嫌い、その後の掃除のことの方が頭に浮かんでこのような自由な着想が出てこない。「遊び」とは自由という意味もある。保育者自身が毎年同じ活動で満足するのではなく、新企画に挑戦する意欲も大切であり、その研究の時間も必要である。昨今の保育事情ではその時間の確保は難しいが、工夫をしながら時間を作りたい。アート活動には自由な発想とゆとりがなくてはならないからである。

さて、会社の寿命は三十年と云われるがアートは永遠である。どんなに文明が発達しても人の喜びや悲しみや愚かさ等は変わらない。それを後世に残せるのはアートのみである。子どもたちがアート活動を通して表現する喜びを知るだけではなく、ゴッホの「ひまわり」から生の喜びを、長谷川等伯の「松林図」から死の悲しみを、ピカソの「ゲルニカ」から人の愚かさを感じられるような人間性豊かな人に成長することを願うものである。（上原康央）

５－１－２　大森こども園の保育者の声

７月21日（月）に２回の実践を振り返る会を大森こども園にて行った。そこで園の先生方の感想や子どもたちの様子を聞き、その内容を以下にまとめた。

外部の人材の介入によって、子どもたちが非日常を楽しむ様子が見られた。そのため、私たち（園の先生）との活動では構えてしまう子どもも多いが、ワークショップの際には、子どもたちには日常とは違ったワクワク感や勢いがあり、遠慮なく活動している姿を見ることができた。普段の表現活動では、ゴール（作品の完成）を決めるのは保育者であり、子どもたちの作品はほとんど同じようになってしまう。そのため、普段の活動では器用な子と不器用な子との差が出来てしまうが、今回のワークショップでは子どもたち一人ひとりが満足できる活動になった。

子どもの満足度の高さは活動後の子どもたちの様子からも裏付けられる。ドキュメンテーションウォールを見て、文字が読める子は「〇〇って書いてある！」と発言したり、写真や絵を見て「△△だったよね～」と話していたり、帰りにかばんから取り出して「この色やったよー」と見せていたりと、活動が終わってからもワークショップの話題が子どもたちから頻繁に出てきていた。また、この２回の実践で使用した体育館は外からも目に入りやすく、お迎えに来た保護者の方から、「今日は何をやったんですか？」といった声を良くかけられたり、子どもが自分で描いたところを保護者に示して説明していたりする姿も見られた。大人が見ると全部一緒に見えてしまっても、子どもにとっては自分自身の価値になっていたようだ。

今回のワークショップは普段の活動とは違った価値を生み出し、子どもたちからも「またやりたい。」という声が多かった。一方で普段の保育現場では、先生たちの多忙さゆえ、子どもたちに毎日違った体験、新鮮な体験を保証することは難しいということが現状である。（まとめ：毛塚鮎美）

５－２．学生スタッフの声

・BFAプロジェクト第１回目の活動である「色紙あそび」では、初めにからだ全体を使ってお花紙と戯れる時間を設けたことで、素材と十分にかかわることができたように思う。その後の窓やプラスチック段ボールを使った活動では、それぞれが気に入った表現を見つけて熱中する姿を多く見ることができた。濡れたお花紙が光を通し、いくつかの色が重なり合う姿は大変美しく、ホール全体が子どもたちの活発な動きや声、美しい色合いで包まれていた。

第２回目「あわぶくあそび」は、筆者（岡本）が提案して行った活動である。遊びの中に造形的な美しさや面白さがたくさん溢れているということに気づいてほしくて考えた活動だ。シャボン玉は身近な遊び道具の１つであり、実際に４歳児のほとんどがシャボン玉遊びを経験していた。いつも遊んでいるシャボン玉の造形的な魅力にもっと気づいてほしいという思いから、まず初めにシャボン玉とたくさん触れ合う時間をつくった。からだ全体を使ってシャボン玉と戯れる中で、シャボン玉独特の動きや光の反射、触れるとすぐに消えてしまう尊さなどを感じることができたように思う。また、シャボン玉をつくる行為も、自分のからだの中から吐き出す息の量と強さがポイントになっており、次第にからだが温まっていくのを感じることができた。粉絵の具の入った色付きのシャボン玉と紙が出会うと、想像できなかった色や形が生まれ、泡独特の表現を楽しむことができたように感じる。最後には自分の作品を嬉しそうに持って帰る子どもたちの姿を見ることができて良かった。　（岡本麻衣）

・私は２回目の実践「あわぶくあそび」に参加した。子どもたちは、準備をしている時点で外から部屋を覗き込んだり、「今日は何するの？」と尋ねてきたりした。そのような期待感や、早くやってみたいという気持ちを大切にして、一人ひとりが参加できるよう力添えをしようと思い活動に臨んだ。とくにシャボン液に息を吹き込み、泡をつくるシーンはどの子どもも夢中になっているようだった。子どもにとって泡は、手を洗う時、お風呂に入る時、シャボン玉遊びをする時など、日常生活の中でも限られたところでしかかかわらない。そういったものを自分でつくり出すことは、とても魅力的だったのではないだろうか。友だちと自分の泡の感じや色の違いを楽しみ、中には違う色の液をもらい混ぜている子どももいた。自分自身が満足できるからこそ、他者とかかわり合う余裕が出来たのかもしれない。そしてその満足とは、泡ができやすく、発色がよいシャボン液を調合したり、活動内容や声かけを絞ったり等の、活動する環境の洗練によってできるものだと思う。　（山本爽佳）

・私は普段アルバイトで小学生の子どもたちと関わったり、教育実習で小・中学生の児童生徒と接したりすることがあったが、幼児と触れ合うのは初めてであったのでとても新鮮に感じた。またこの活動の記録として、子どもたちの活動と同時進行でドキュメンテーションウォールを描いたが、初めての経験で難しく感じた。外側にいるだけでなく子どもたちの中にも入っていかないと声を拾うことができないと感じた。１回目のお花紙を使った活動で、霧吹きで水を吹きかけて貼り付けるだけでなく、コップの中でお花紙をかき混ぜて、トマトジュースに見立てている子がいたのが印象的であった。また２回目の活動では、子どもたちが「今日は何やるの？」と顔を輝かせながら聞いてくることがあった。少しではあるが、子どもたちとの関係を築きつつあるのではないかと感じた。泡を吹いて紙に写し取るだけでなく、泡を作る過程そのものを楽しむ子もいて、大人が予想しないような子どもたちの行為にたくさん驚かされた。　（和賀あずさ）

図１　ドキュメントウォールを作成[3]：文字や絵による記録により、活動を可視化する。後に、この活動を共有する際にも有効に働く。

５－３．ARIGATO COMPANYの声

保育・幼児教育は未来の社会を担っていく人の人格形成の基盤を作る役割がある。０～６歳の間に子どもがどのような環境にいたのかによって、その後の人生が左右されるということを「幼児教育の経済学」[4]

から知った。では、子どもにとってよい環境とは、どのような環境なのか。その疑問に向き合う一つの手段としてこのBFAプロジェクトがある。

筆者は大森子ども園と群馬大学のつなぎ役となり、主にファシリテータの補助として実践に関わっている立場である。２回の活動の中で特に印象に残ったできごとがあった。それは、色紙あそびでのＡ君の行為である。遊びの終わりの時間が来ていたが、Ａ君がまだコップを強く持っていて集中している様子だったので「まだやっていいよ。」と伝えた。するとＡ君はさらに遊びを進めていき、最後に桶の中に色水を出し、混ぜた紙が一つ一つの色の塊になっているのを見て、満足した表情をした。

このエピソードから筆者は、子どもが好奇心を素直に表現し、やりきることができる環境をつくっていくことが必要であると感じた。　（石原加奈子）

５－４．実践を通じた考察

実践を通じて大切にしてきたことは、身体感覚を拓き、協同による遊びを通して共に素材を味わい探索することである。アート活動では、まず自他共に動き、十分に心身を解きほぐすことを重視している。心身＝からだが解放された状態から、すんなりと造形的な探索活動に没入する子ども本来の姿が具現化する。

実践では、子どもたちが全身で対象に関わり、世界に働きかけていく姿や、その子なりに最大限の挑戦をしている姿を見ることができた。例えば、少し紙をずらしたり、色を変えたりしながら、一箇所に厚い層になるほどお花紙を貼り付けている子がいた。「こうしたら、どうなるかな？」「どこまでできるかな？」子どもなりの探索行為やその痕跡から、私たち大人も改めて気づかされることや学ぶことがある。保育者の感想の中で、「この子（普段の活動ではあまり目立たない、造形活動が苦手だと思われていた子）はこんなことができるんだ！？あんなこともしてる？」という驚き、気づきがあった。このような子どもたちの姿や行為は、日常の凝り固まった関係性を脱却し、新たな見方や捉え方に導いてくれる。これは一方行の指導や伝授では得難い、相互作用の関係において生まれる気づきである。アートを通じた活動には、自他の関係性を更新する力がある。そのことをおおらかに受け入れられる保育の現場では、子どもも大人も共に学び合う可能性が広がっている。

また、子どもたちの力によって広い体育館を彩り、異なる空間へと変化させることができたという充実感や達成感は、協同的なアート活動ゆえのことである。実践では、個々に集中した活動に加え、友達と協力する姿や真似し合う姿があった。さらに、その姿に触発されて、共に活動し笑い合う保育者の姿もあった。今後実践を重ねていく中で、自他の興味･関心に共鳴し、協同し合う中で展開する学びの姿を丁寧に追っていきたい。

今回の実践では、園外の者が関わることで普段とは違った特別感や期待感が子どもたちのワクワク感を募らせ、ダイナミックな活動へと展開した感がある。一方、お花紙やシャボン玉は子どもにとって身近な素材ではあるものの、実践自体は子どもの生活から生じた活動とは言い難い。今後は保育者とも連携し、子どもたちの日常生活により密接した活動内容も考慮したい。そのような取り組みから、アート活動が決して特別なものではなく、身近なものであると同時に、日々の生活をより豊かにしていく契機であることの実感につながることが期待される。　（郡司明子・宮川紗織）

６．おわりに

本稿では、“BFAプロジェクト”における幼児のアート活動に関する準備過程と企画コンセプトに加え２回の実践についてそれぞれの視点で論じてきた。

本プロジェクトは始動したばかりだが、今後に向けて新たな課題も見えてきたので以下に示したい。

①活動内容の共有と振り返りの充実

実践と振り返りを通じ、“子どもの生活を豊かにするアート活動”への共通理解を深めることが重要である。従来の指導型による「描きましょう、つくりましょう」といった造形製作とは異なるアート活動（探索活動の保障）の価値を共に分かち合う必要性を感じている。その際、外部スタッフと園とのフラットな関係性を築くためにも、互いの専門性を生かしつつ、同じ保育に携わる者同士、対話的で建設的な意見交換を通じ、今後の活動をより充実した内容にしていきたい。さらに、その場に参加していない保育者や保護者、子どもたちにも活動内容やその意義を共有していくために、ドキュメンテーション（活動や学びの可視化）のあり

方も含め、検討していきたい。

②地域に向けた取り組みとして

本プロジェクトは高崎市内へと活動の幅を広げていくことを視野に入れた長期的な取り組みを想定している。2017年度は、あと４回のプログラム実施となり、2017年10月にはARIGATO COMPANYから高崎市内の複数園への呼びかけを通じ、見学会も兼ねた実践になる予定である。来年度以降の実施園とそれに伴う内容保障、スタッフの人員確保など、解決すべき課題が多々ある。保育者による実施も考え、分りやすく活動がイメージしやすいテキストや画像等の資料を準備していく必要もあるだろう。これらの課題に対応すべく本プロジェクトのシステムそのものを整備しながら、地域に向けた新たなアート活動を展開していきたい。

（郡司明子・宮川紗織）

註

1）　ドキュメンテーションの考え方は、イタリア・レッジョ・エミリア市の幼児教育における「ドキュメンタッツィオーネ」（記録された行動を他者が理解するのを援助することができるように詳細に記された達成記録）に由来する。
C・エドワーズ／L・ガンディーニ／G・フォアマン編　『子どもたちの100の言葉』世織書房、2001、森眞理『ポートフォリオ入門』小学館2016　参照.

2）　郡司明子「からだ・気づき・対話のアート教育－小学校の授業実践からその意義を探る－」『子ども学』第３号、萌文書林、2015

3）　ドキュメントウォール（DW）は、茂木一司、上田信行、苅宿俊文、佐藤優香、宮田義郎編『協同と表現のワークショップ』東信堂、2010における第４章に詳細な記述がある。

4）　ジェームズ・J・ヘックマン著／古草秀子訳『幼児教育の経済学』東洋経済新報社、2015年

（ぐんじ　あきこ・みやかわ　さおり・うえはら　やすひさ・ふくしま　なお・いしはら　かなこ・けづか　あゆみ・おかもと　まい）